



海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

OVERSEAS

海外事情

UAE: United Arab Emirates

— アラブ首長国連邦 —



魅力溢れるアブダビ首長国でアラブを満喫!



油谷 百百子 ABURAYA Momoko
パシフィックコンサルタンツ株式会社 / 総務・労務部 / 広報室長

2019年10月6～10日に開催された第26回世界道路会議および併設の技術展のため、アラブ首長国連邦(UAE: United Arab Emirates)のアブダビ首長国を訪れた。アブダビへは成田空港から直行便で約13時間、アブダビ国営エティハド航空が運航している。帰国便は、台風19号

の影響により成田空港が着陸制限を行ったため2日間欠航となり、アブダビで延泊を余儀なくされた。日本で馴染みの薄いアブダビで、滞在期間が長くなったこともあり紹介してみたい。

異国情緒を感じる UAE

UAEの伝統的な白装束カンドゥーラに身を包み、頭にクットラを被り、黒い紐アカールを載せた男性たちと黒装束のアバヤを着た女性たち。この姿を見ると、一気に「アラブに来たな」という気分になる。男性が白一色、女性は黒一色という男女共にロングワンピースのような装束は、気温の高いアラブでは風も通るので涼しく、理にかなっている

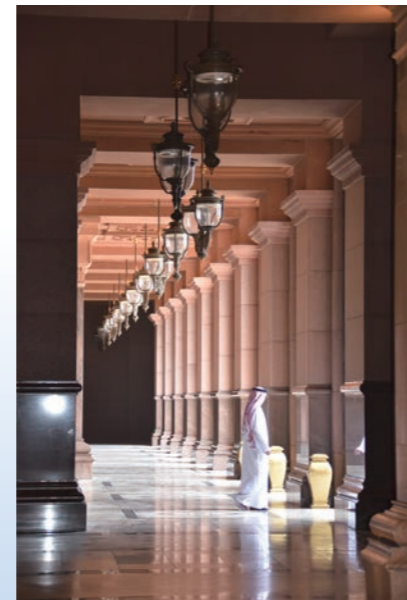


写真1 アブダビの超豪華ホテル エミレーツパレスの回廊にて

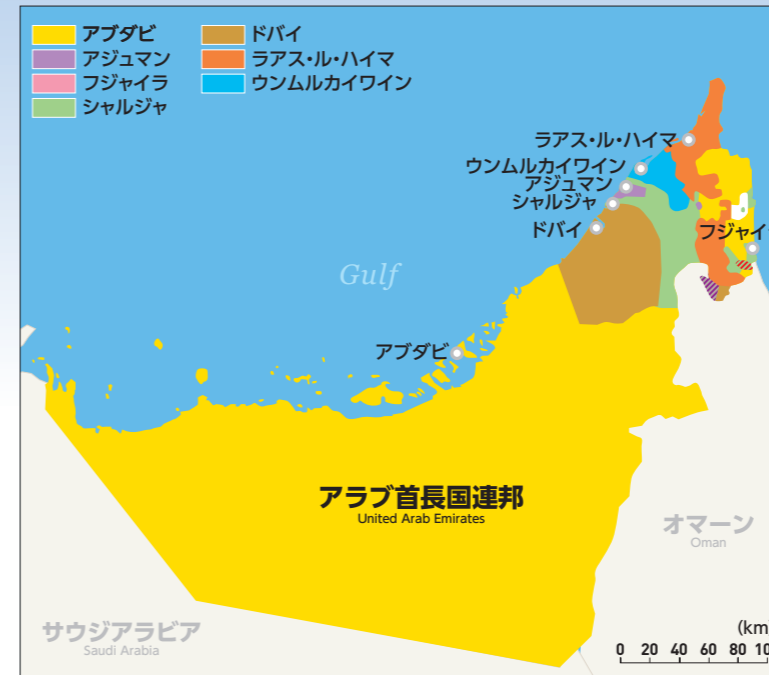


図2 UAEの地図

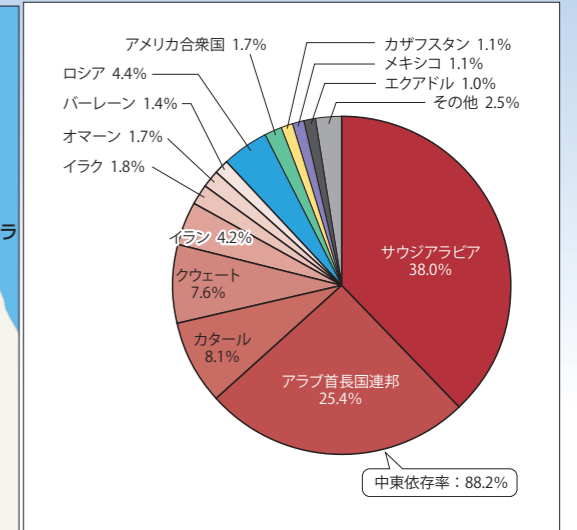


図3 石油統計～日本の原油の地域別輸入比率～(2018年、経済産業省)

83,600km²で北海道とほぼ同じであるが、その内の約80%の67,340km²をアブダビ首長国が占め、ドバイ首長国は4,114km²と僅か5%である。

1950年代にアブダビとドバイで石油が発見されたが、ドバイは近い将来に石油が枯渇すると想定されたため、交通の要衝という地の利を活かして港湾や空港を整備し、貿易・観光・商業に舵を切った。

一方、アブダビは豊富な石油と天然ガス資源による潤沢な資金をもとにUAEの首都として確固たる地位を築き、国家予算の8割を捻出し、

のかもしれない。ちなみにカンドゥーラは日本メーカーの生地が最高級品として人気だ。

イスラム教の聖典では女性は顔と手以外は隠すように定められている。時折、袖口からその下に着ているドレスがチラリと覗くことがあり、その華やかな色に驚く。女性たちは黒装束の中やバッグなどでお洒落を楽しんでおり、映画『セックス・アンド・ザ・シティ2』のアブダビシーンを思い出す。

UAEの基礎知識

UAEはアラビア半島にある連邦国家で、アブダビ、ドバイ、シャルジャ、ラアス・ル・ハイマ、フジャイラ、ウナムルカイワイン、アジュマンという7つの首長国から構成され、各首長国は世襲の首長による絶対君主制に基づき統治されている。1971年にイギリス保護領から6首長国が連邦国家として独立し、翌年ラアス・ル・ハイマが加わり現在の7首長国となった。UAEの国土面積は約



写真2 カンドゥーラを着た男性たち



写真3 アブダビの街並み



図1 アラビア半島とUAE

4. 他地域における取組み事例



写真4 シェイク・ザイド・グランド・モスク



写真5 貸衣装のアバヤ (右端)

国防費用に至っては全額を負担している。石油および天然ガスの埋蔵量は共に世界7位で、その大半をアブダビが保有する。また日本の原油輸入比率の25.5%をUAEが占めており、UAEにとっても日本は最大の原油輸出国になる。

UAEは多数の外国人の就労を認めているため、居住者の9割が外国人という世界有数のグローバル国家である。1割のUAE人は、ほぼ政府機関に就職し高額な給与を受け取り、教育と医療費は無償、結婚時の住宅購入資金支援、規模の大き

い外国企業には一定数のUAE人の雇用を義務付けるなど、国として自国民に対し様々な優遇制度を設けている。

アブダビの街並みと巨大モスク

UAEの中で最も国土が広く、資源の豊富さから潤沢な資金を持つアブダビは、ドバイほどの派手さはないが市内には大型ビルが立ち並び、主要な道路は整備され路上駐車も少ない。スーパーマーケットや飲食店も多く、治安も日中であれば女性1人の外出であっても問題ない。

アブダビからドバイに通じる片側4車線や6車線の一直線の高速道路を走ると、すぐに左右は砂漠となる。道路の両脇にはラクダが入り込まないよう衝突防止柵があったり、一定の間隔で国営のモスク付ガソリンスタンドがあったりするはこの地特有だ。アブダビやドバイでは少し郊外に出るとラウンドアバウト(環状交差点)を多く見かける。砂漠ではあるが豊富な土地と直線道路が多いこの地では、スピードの出しすぎによる事故対策と、方向転換の方策としてラウンドアバウトが取り入れ



写真6 ドバイのバスステーション



写真7 ドバイからシャルジャへ向かう途中の渋滞



写真8 シャルジャの街並み



写真9 デザートサファリー列に並んだ4WD

られているようである。

1日5回コーランが街中に響き渡るアラブの国では、各所にモスクがあるが、異教徒の出入りを許可しているところは少ない。その中で2007年に建てられたアブダビのシェイク・ザイド・グランド・モスクは4万人を取容できる巨大なイスラム教の礼拝堂で、UAE建国の父であるザイド・ビン・スルタン・アル・ナヒヤンが埋葬されており、異教徒でも内部を見学することができる。入場する際には離れた建物の地下を通り、名前や国籍などを登録する。その後、係員による服装チェックがあり、髪の毛や肌が出ていたり、派手な服装の女性は、通路脇の更衣室でアバヤを借りることができる。伝統的なイスラム建築と近代建築が融合したとされるモスクはその大きさに圧倒され、ライトアップされた夜はより一層幻想的である。

首長国間の移動手段

UAEではドバイのメトロ以外に鉄道がないため、主な交通手段は車であり、多くの人々が首長国間の移動手段として長距離バスを利用する。アブダビからシャルジャへ行く場合は、直行便は1日数本に限られるため、本数の多いドバイ行きに乗り、

ドバイで乗り継ぐ必要がある。ドバイでは中心地から離れた場所にバスステーションがあり、そこからシャルジャへ行くバスに乗り継ぐ。バス停の場所、行き先、発車時刻の表示がないため、その都度係員に確認する必要がある。後から分かったことだが、ドバイにはアル・グバイバ・バスステーションとユニオン・スクエア・バスステーションの2つがあり、行き先によってバスステーションが異なる。シャルジャからの帰り、ドバイでは違うバスステーションに着いてしまい、タクシーでもう一つのバスステーションへの移動が必要となった。

バスステーションは夕方以降になると混んできたが、居住者以外は見かけなかった。またバス車内では、男女が分かれて座ることが暗黙のルールになっており、前方に女性、後方に男性が座るようである。乗り込んで席を探すと、何も言わず一番前の席を譲ってくれた。ちなみに、バスのチケット購入窓口も男女別であった。

第3の首長国シャルジャと悪徳タクシー

UAEの中で3番目に大きな首長国シャルジャは、ドバイから15kmほ

どの距離にある。ドバイへの通勤者が多く住むとのことだが、ドバイとシャルジャを結ぶ主要な道路が1本しかないため、交通量が多く渋滞により1時間以上かかることも多いらしい。19世紀後半にはアブダビと地域の主導権争いをするほどの力を持っていたシャルジャだが、石油埋蔵量が少なかったことから現在は工業と観光産業に頼らざるを得ない状況のようだ。

また、シャルジャはUAEの中で最も厳格なイスラム教国とされ、酒類の販売や飲酒が禁止されており、学校でも男女は分かれている。アブダビやドバイに比べると古びた建物ばかりで人通りがなく閑散としており、女性の姿を見かけなかった。日中に女性2名で中心部を歩いたが、長袖ロングスカートにも関わらず、商店の前に座っている男性グループにじっと見られるため居心地が悪かった。

イスラム文明博物館から街の観光名所セントラル・マーケットに移動するため、タクシーに乗ったところ、不運にも悪徳タクシードライバーに捕まった。車を出した後に運転手が「目的地が分からない」と言い出したのである。車を止めて早々に降りたところ、僅か5mの料金を支

払えと運転手が声を荒げてきた。無視をして車の進行方向とは逆に歩き出したところ、車で追いかけて来た。車の入れない細い路地に入り大通りに出ると、今度は車を停めて走って追いかけて来る。しつこく追いかけてきたことや顔を近づけてバッグに手を入れようとしてきたことから安全を第一に考え、やむを得ず料金(200円弱)を支払った。あまりに腹が立ったので支払い時に運転手を撮影しようと思ったが、スマホを壊されても困るので断念した。

後日、ドバイ在住の方にその話をしたところ「タクシーのナンバーの写真か発行されたレシートを後日、警察に届けるとよかったのに」と言われた。悪質な営業として運転手に罰金が科せられ、3回繰り返すと就労許可が取り消されるため、労働者はそれを何より恐れるとのことである。直接対峙せずとも対処法はあると勉強になった。

砂漠を体感するサファリツアー

アブダビやドバイに行ったら是非とも参加したいのがデザート・サファリツアーである。ホテルまで迎えに来たランドクルーザーに乗り、片側6車線の道路をしばらく走ると、見渡す限りの砂漠地帯が現れる。



写真10 デザート・サファリツアー

その砂漠地帯に入り、道なき道を走ると、ツアーのスタート地点に到着する。ツアーに参加するランドクルーザーが砂漠にずらっと並んだ姿は圧巻で、そこから隊列を組み順番に砂漠を滑り落ちるように豪快に走っていく。斜めになったサンドページの世界で、時間軸が吹っ飛ぶ。

砂漠の中に突如現れたキャンプサイトでは、ラクダに乗ったり、現地の衣装を着てみたり、サンドサーフィンも楽しむことができる。夕食時にはベリーダンスショーがあり、ラストは参加者も舞台上がり砂漠での楽しい夜を満喫できる。

なお、外務省HPでは、中東呼吸器症候群(MERS)の感染源である可能性の高いラクダとの接触やラクダの未加熱肉などを食べることを避けるよう注意を呼びかけています。「地球の歩き方」でも見た記憶がありませんが、外務省のHPには出ていますのでご注意ください。

さっぱりして食べやすいアラビア料理

アブダビではアラビア料理としてレバノン料理やトルコ料理、イエメン料理がよく食べられているが、それは出稼ぎ労働者が多いためだ。ハー



写真13 前菜のフムス



写真14 前菜のタブーレ



写真15 渡し船アブラ



写真16 ドバイの噴水ショー



写真11 全員参加のディナーショーのラスト



写真12 ラクダに乗る

ブ類を使った料理が多く、スパイシーだが辛さはなく爽やかで食べやすい。

前菜で定番とされるのが「フムス」というひよこ豆をペースト状にしたもので、ディップ(クリーム状のソース)のようにパンや野菜につけて食べる。「ムタッパル」という焼きナスをペースト状にしてヨーグルトレモン汁で味付けしたディップもある。また、パセリやトマト、玉ねぎを細かく切った「タブーレ」や、「ファットウシェ」というキュウリ、トマト、ピーマ

ン、レタス等のサラダはどちらもレモン汁と塩、オリーブオイルで味付けされ、さっぱりしていて美味しい。前菜だけでも気分が上がる。メイン料理は日本でもお馴染みのケバブや、ハモールというクエの一種の白身魚のグリルなどがある。どの料理もあっさりしていて日本人好みの味である。

少しだけドバイ情報を

日帰りドバイを訪れたが、旧市街と中心部を流れる入江の渡し船

「アブラ」は長閑な雰囲気の中でドバイの景色を楽しめるのでお勧めである。「これぞドバイ!!」を堪能したい方は、ドバイ・モールを囲む人工湖で行われる噴水ショーとその周囲の夜景は必見だ。

余談になるが「アブラヤ」という私の名前に現地の方々は「どこから来たのか? アラビアンネームだ!」と興味深々だった。